

一

次の——線部①～⑧のカタカナの部分漢字で、⑨・⑩の漢字の部分ひらがなで書きなさい。いずれも一画一画をていねいに書くこと。

将来を見すえて計画的にチヨキンする。

状況をセイカンしたうえで判断する。

発表会に向けてメンミツに打ち合わせをする。

全力で事態のシュウシュウにあたる。

全国大会で優秀なセイセキを収める。

時代のチヨウリュウを見極めて行動する。

大事な試合で実力をハツキする。

出席者全員で最後に決をトる。

この課題を終わらせるのは造作もないことだ。

時には潔く非を認めることも大切だ。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

お父さんは右手に大きな箱をさげて梯子を半分だけ下りてきた。左手左足だけを梯子にかけた不安定な姿勢で、その箱をおばあちゃんに手渡す。箱の上部を覆う古新聞は埃まみれで真っ黒だ。

大きさも重さも異なる箱がお父さんからおばあちゃんへ次から次へと手渡され、地面に下ろされた。なかには一人が寝られるほど長細い木箱もあった。

① おひなさまは、このなかで眠っているのだろうか。毒リンゴを食べた白雪姫のように、茨に閉じこめられた眠り姫みたいにい？

「触るじゃないぞ」

そうやって、おばあちゃんは木箱の上に屈み込んでいた風美を押しつけた。

「あとで呼んでやるで、おまえはしばらく外で遊んどれ」

「どうして？ 早く見たいよ」

「おまえがおったら、邪魔になるんだわ」

おばあちゃんに無理やり毛糸の帽子をかぶせられ、厚手のコートを着せられて、風美はまるで雪だるまのようになって庭の隅にしゃがんだ。

風はまだ冷たかったが、このあいだまで氷のようだった地面はほんのり温もっていた。

芝生のまんなかでは、タンポポが大きく葉を広げ、やがて花咲く準備をしている。

「さむいでしょ。かぜをひくといけませんからね。おふくをきましようね」

風美は ② 。それから、雨樋に枯れ枝をつつこんで泥を掻き出した。驚いたミ

ミズが泥の中から這いだしてくる。大きな石の下には、黒い甲冑を着込んだ団子虫がいた。指で弾くとパチンコ玉のようにまんまるに丸まった。しばらく放っておくとネズミの糞のような元の形に戻って、

もぞもぞと動き出す。もう一度、弾くと、また丸まる。四、五回繰り返したら、さすがに飽きた。

おばあちゃんは、まだ呼んでくれない。

玄関の戸は開いたままになっていた。風美はこっそり土間へ入り、上がり框に手をついて障子戸の間から座敷を覗いた。

お父さんは長くて太い針金を折ったり、伸ばしたりしていた。おばあちゃんは白い塵紙を畳に散らかしている。塵紙の間に、赤と金色の鮮やかな布がちらりとぞいた。

もつとよく見ようと背伸びして、風美は祖母の膝に小さな頭が転がるのを目撃した。

「こら、風美。まだ戻っていいとは言つたらんぞ」

③ おばあちゃんが怖い顔でこちらを見た。

注1 雨樋は建物をつたう雨水を地上に流すための装置。

注2 甲冑はよろいとかぶと。

注3 上がり框は土間と室内との境目の段差部に水平に渡した横木。



あわてて玄関から出ようとして、風美は敷居に足をひっかけ、おでこから何か暖かい柔らかいものにぶつかった。

「あらあら、風美ちゃん。どうしたの」

抱きとめてくれたのは河上のおばさんだった。おばさんのエプロンからは、石けんとみそ汁の匂いがした。ひつつめ髪で痩せ形の風美の母親とは対照的に、河上のおばさんは顔も体つきもふっくらして、ゆるやかにパーマをかけた髪の色も明るく、全体に柔らかい印象を与える人だった。

おばさんの後ろには風美と同じ年のゆうこちゃんやひつつき虫のようにくっついていて、ゆうこちゃんはおばさんの目を盗んで、風美に「いーだ」と前歯を突き出してきた。風美はお返しにあつかんべをしてやろうかと思つたが、そんなことをすれば河上のおばさんに嫌われてしまうだろう。

「今から、お雛さんの準備ですか。大変ですね。回覧板、ここにおいておきますよ」

おばあちゃんは河上のおばさんに挨拶もしなかった。いつも親切で優しい河上のおばさんをどうしておばあちゃんが嫌うのか、風美には理由がわからない。

「風美ちゃん、よかつたら、今から優子のお雛さんを見にこない？」

ゆうこちゃんの家は好きだ。おばさんは優しいし、おいしいおやつも食べさせてもらえる。それに、ゆうこちゃんの家には座敷がないし仏間もない。トイレにはピンクのマットが敷かれ、便器にはピンクのカバーがついていて、いつも花の匂いがしている。

問題はおばあちゃんだ。風美がゆうこちゃんへ遊びに行くと言うと、おばあちゃんは必ず不機嫌になる。

「風美、連れてってまえ。おまえが帰ってくるまでには、こっちの準備もできとるで」

お父さんはそうやって、河上のおばさんに「世話になります」と頭をさげた。

風美はスキップしながら、河上のおばさんとゆうこちゃんの後についていった。

家のまえの小道を下っていくと、小川にかかる橋一つを挟んで、いきなり交通量の多い国道にぶつかる。珪砂や陶土を積んだトラックが切れ目なく行き来する、悪名高いダンプ街道だ。おばあちゃんは道路に干からびて平べったくなった蛙をみつけるたびに「ええか、あの蛙をよう見とけ。ダンプ街道を一人で渡つたら、おまえもあつというまにペレちゃんこだでな」と風美を脅していた。

▼ゆうこちゃんの家は、その国道の向かい側にあった。青い瓦屋根に白い壁のこぢんまりした家は、絵本にでてきた外国の家のように見える。

「ほら、優子、風美ちゃん、渡るよ。転ばないようにね」

遠くの信号が赤になったところで、河上のおばさんは風美とゆうこちゃんの手をとった。

風美はおばさんの手をぎゅっと握り返して国道を横断した。

河上のおばさんがついていってくればダンプカーも怖くない。おばさんの手は暖かくてすべすべしていた。ささくれだらけ皺だらけのおばあちゃんの手とは大違いだ。

河上のおばさんは物干し台に吊された洗濯物をかきわけて庭をまわり、リビングから家へ上がった。

「どう？ 風美ちゃん、去年はお母さんに連れられて見に来ただけど憶えてる？ うちのお雛さんも可愛いでしょう？」

小さな人形たちは、クリーム色のソファの向こう、テレビの脇に飾られていた。階段状になった赤い敷物の上にちよこなんと座っている。

最上段には黄金の金具で飾られた黒塗り屋根の御殿がおかれていた。回廊には朱の欄干がめぐらされ、紅と緑の御簾が垂れている。紅の御簾の前にはお姫さまが、緑の御簾の前にはお殿さまが座っている。その下の段には髪長い大人の女の人が三人、そのまた下には太鼓や笛をもった子供が五人いて、最下段にはおままごに使うような小さな家具が並べられていた。(中略)

ゆうこちゃんは雛壇へにじり寄り、牡丹唐草模様の簞笥を取り上げた。風美に見せびらかすように赤い房をひっぱって抽斗を開ける。なかには何も入っていない。風美は牛車の牛の頭を撫でてやろうとした。

「さわつちや、いけないだよ」
ゆうこちゃんが口をとがらせて言った。(中略)

「優子、あんただって触つちや駄目なのよ」
キッチンからお盆をもって出てきた河上のおばさんがゆうこちゃんをたしなめた。

「あああ、また、ふうちゃんのせいで、お母さんにしかられた」
ゆうこちゃんはふくれつらで、カーペットに足を投げ出した。

「ほら、二人ともソファに座りなさい。お団子、食べるでしょ」
河上のおばさんは、ゆうこちゃんと風美に雛団子を一皿ずつ勧めてくれた。

ゆうこちゃんはさつと手を出して、淡い緑と桃色、白の三色団子の串をくわえた。

「こら、優子。お客さまが先でしょ。風美ちゃんにどうぞって」
「ふうちゃんは、おきやくさんじゃないもん」

「お行儀の悪い子は、お母さん、嫌いよ」
ゆうこちゃんは風美のお皿を取り上げた。

「これは、みんな、ゆうこのだからね。ふうちゃんはたべちゃだめ」
河上のおばさんが強く叱ると、ゆうこちゃんは泣き出した。

「だって、ふうちゃんは、ゆうこのもの、何でもとるんだもの。おひなさまだって、おだんごだって、おもちゃだって、お人形だって、みいんな、ふうちゃんにとられちゃう」

「ちよつと貸してあげるだけでしょ。ほら、機嫌直して。お団子、おいしいよ」
河上のおばさんは団子をほおぼつてみせたが、ゆうこちゃんは泣きやまなかつた。

「優子、いい加減にしないと、お父さんに言うからね」
ゆうこちゃんはますます大泣きして、河上のおばさんにしがみついた。▲

「お母さんは、なんで、ゆうこばつかり、ごしかるの。ふうちゃんが悪いのに。しかるなら、ふうちゃんをしかつてよ」

河上のおばさんは、ゆうこちゃんの目の高さにはしゃがみこんだ。
「いい子だから泣かないの。お母さんは」
おばさんの声は小さかったが、風美には、はっきりと聞こえた。

風美はゆうこちゃんの家を飛び出した。

後ろから「風美ちゃん、ちよつと待つて」と呼びかけられたようにも思ったが、けつしてふりむかず、自分一人で靴を履き、ダンプの往來激しい国道さえ一人で渡つて、家まで一心に駆けた。

「河上さんは送つてくれなかつたのか」
一人で帰つてきた風美を見て、お父さんは困惑したように言った。

「ほだで、河上んこの嫁はあてにならんちつとるだわ。風美がダンプに轢かれとつたら、どうするつもりだつたやあ。ここはきつちり文句いってやらなかんわ」

「やめとかつせ」
「おまえはいつともそうだ。おまえが弱腰だで、河上の爺に舐められるだぞ。こないだだつて、いいように言いくるめられちまつて、わしとおまえの父ちゃんが夜も寝んで稼いだ金で買戻した地所だつちゆうのに情けない」

一方的に言いつのるおばあちゃんの脇をすりぬけて、風美は家に入った。上がり框の障子戸は開けつ放して、土間からでも座敷に飾られた雛壇がよく見えた。

緋毛氈の雛壇は、ゆうこちゃんの家で見たものより、もうひとまわり大きかつた。最上段には金屏風を背に内裏雛が仲良く並び、次の段には三人官女、それから五人囃子もちゃんと揃っている。矢を背負つた右大臣と左大臣の間にはお膳と菱餅がそなえられ、三人仕丁のそばでは右近の橋に左近の桜が咲いていた。下段には、牛車や女駕籠のほか黒地に亀甲菊紋のお道具が並んでいる。

「どうじゃ、よう見よ。立派なもんじゃろう。わしが金だして買つてやつたんだぞ」
おばあちゃんは小鼻をふくらませて自慢した。

⑤ 風美は返事に困つた。
「なんじゃ、うちのお雛さんに不満でもあるのか」
「ごてんは？」
「ごてんは？」
「ごてん？」

「ゆうこちゃんちのおひなさんにはごてんがあつたよ。このおひなさんには、おうちがないの？」
祖母の眉が吊り上がり、風美はあわてて付け足した。

「これじゃ、おひなさんがかぜひいちゃうよ、きつと」
「おまえは、ほんなに河上んちが好きか？」
「……」

「この家より河上んこがいいなら、おまえは河上の子になれ。この家には二度と戻つてくるな。このお雛さんも燃やしちゃうわ」
どうして怒られているのか分からなかつた。

注4 緋毛氈は雛壇の下に敷く緋色(朱に近い赤色)のフェルト状の布。

注5 三人仕丁は雛壇の五段目に飾られる三人の人形。

注6 亀甲菊紋のお道具は亀の甲羅や菊をかたどつた紋が描かれた道具類。

涙がこみあげてきたが、おばあちゃんは泣き虫が大嫌いだ。

風美は両手を固く握りしめて我慢しようとした。

「なにをぐずぐずしとるだ。早よ出てけ。どこへでも、おまえの好きな家へ行っちゃえ」

雀や野犬を田畑から追い払う時のように、おばあちゃんは風美にむかって足を踏み鳴らした。

風美は嗚咽をこらえきれなくなった。

「ほれみよ、ちよこつとばか、きつく言われただけで、すぐに泣くだら。おまえみたいな泣き虫はわ

しの孫じゃないわ。河上んところがお似合いだ」

泣きながら、風美は家を飛び出した。

「風美、どこ行く気だ。そろそろ暗なるぞ」

「甘やかすと癖になるわ。放かっつけ」

わあわあと大声をあげて泣きながら、風美は田端の小道を走った。

おばあちゃんは、わたしのことが嫌いなんだ。

お父さんだって、わたしがどうなってもいいと思ってるんだ。

わたしなんか、いなくなっちゃったほうがいいんだ。

国道前の橋の上で、風美はしゃがみこんだ。

何度もこすったせいで瞼がひりひりと痛かった。喉も暖れて、もう大声が出ない。それでも、泣かずにいると胸のなかにもやもやと気持ちの悪い塊が溜まってくるから、小さくでも啜り上げずにはいられなかった。

これから、どこへ行ったらいいんだろう。(中略)

国道の向こうで、ゆうこちゃんの家に明かりがついた。ゆうこちゃんのお父さんが帰ってきたんだろうか。おばあちゃんはゆうこちゃんへ行けと言うが、河上のおばさんはゆうこちゃんがいちばん好きなのだ。

おうち、なくなっちゃった。

河上家の裏手では、工事中の鉄道高架やお椀を伏せたような形の小山が夕日の照り返しを受けて色づいていた。山のくすんだ緑は明るくなり、薄汚れた高架のコンクリートは茜色に染まっている。風美が眺めているうちに、夕焼けは微妙に色合いを変え、高架の壁はオレンジがかったピンクに塗り替えられた。通り抜けのためのトンネルは黄金の光に縁取りされている。

あそこが、おとぎの国への門かもしれない。

もつとよく見ようと、風美は立ち上がった。

白雪姫やシンデレラのお城は、あの高架の向こう側にあるのだろう。そこへ行けば、きつと、お姫さ

またが

——待ちわびましたよ。

耳元でささやく声が聞こえたような気がした。

日が沈むにつれ、高架の壁からピンク色は薄れていき、黄金の光は散っていった。

魔法の時間は終わろうとしている。



——さあ、急いで。ぐずぐずしてたら、間に合わない。

風美は、おとぎの国への一步を踏み出そうとした。(中略)

「そんなところで、何しとる。あやうく、轢いちまうとこだったがや」

お父さんが車の窓から顔を出した。

「いつまでも、こんなところにおつたら、風邪ひくぞ。お父さん、仕事に行ってくるで、機嫌直して家へ帰つとれ」

「だって、おばあちゃんが」

「おばあさんがどうした」

「出て行って」

「そんなこと、本気で言うわけないがや」

お父さんにハンカチで涙をふいてももらっている間に、^⑦ものすごく不機嫌そうな顔をしたおばあちゃん

んがやってきた。

風美はボンネットの陰に隠れたが、おばあちゃんの目はごまかせなかった。

「このたわけが。どつかへ行けつて言われたら、ふつうは泣いて謝るぞ。それを言われたまんま、ほんとに出ていく馬鹿がどこにおる」

そう言つて、おばあちゃんは風美の頭にごと一つ、げんこつをくらわせた。

お父さんは、風美とおばあちゃんに片手をあげて合図すると、化け物ダンプの隙をついて国道へ出て

いった。

(粕谷知世「ひなのころ」による)

問一——線部①「おひなさまは、このなかで眠っているのだろうか。毒リンゴを食べた白雪姫のよう

に、茨に閉じこめられた眠り姫みたいに？」とありますが、ここでの「風美」の気持ちとして、
とも適切なものを次の1〜4の中から一つ選び、番号で答えなさい。

1 雛飾りの準備を進める「お父さん」と「おばあちゃん」の手際の悪さにいらだちを感じる一方で、最終的には立派な雛飾りが完成するのを心の底から願う気持ち。

2 雛飾りの準備を進める「お父さん」と「おばあちゃん」を童話の世界の登場人物になぞらえて想像を膨らませる一方で、雛人形が期待よりも貧相なものではないかと不安に思う気持ち。

3 「お父さん」と「おばあちゃん」が雛飾りの準備を進めるのを待ち遠しく感じる一方で、童話の世界の登場人物とどちらが美しいのかを正確に判断しようとする気持ち。

4 「お父さん」と「おばあちゃん」が準備している雛飾りが立派なものになるのを楽しみにしている一方で、本当に期待通りの雛人形が収められているのだろうかと心配する気持ち。

問二 ② に入れる表現としてもっとも適切なものを次の1〜4の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 土で壁を作って、タンポポの葉を寒さから守ってやった
- 2 花を摘んできて、タンポポの葉の隣に並べてやった
- 3 枯れ葉を集めて、タンポポの葉にかぶせてやった
- 4 そっと息を吹きかけて、タンポポの葉を温めてやった

問三 線部③「おばあちゃんが怖い顔でこちらを見た」とありますが、どうして「おばあちゃん」は「怖い顔でこちらを見た」のですか。その理由としてもっとも適切なものを次の1〜4の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 普段から言いつけをいい加減にしか聞いていない「風美」が、今度も約束を守らずに勝手な行動をとっているため、「風美」にこれ以上馬鹿にされないように、威厳を示そうと考えたから。
- 2 普段から口うるさく接している「風美」に、自分の不手際を知られて気まずい雰囲気になったため、「風美」に対して怒ってみることで、その場をやり過ぎそうと考えたから。
- 3 普段は何でも言うことを聞く「風美」が、この日に限って自分の言いつけを守らずに勝手な行動をとっているため、「風美」がこれ以上凶に乗らないように、釘を刺そうと考えたから。
- 4 普段から自分のことを恐れて距離を置いている「風美」に、めずらしく近づいて来られたため、気恥ずかしさを感じながらもこれまでと同じような厳しい接し方を維持しようと考えたから。

問四 ④ではさまれた部分から読み取れる「風美」と「ゆうこちゃん」と「河上のおばさん」の関係を説明した文章としてもっとも適切なものを次の1〜4の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 「河上のおばさん」は、意地の悪い娘よりも礼儀正しい「風美」に好感を持っており、「風美」は「河上のおばさん」に心から感謝している。一方、「ゆうこちゃん」は「風美」がいつも勝手に持ち物を使って我が物顔に振る舞うことに我慢できず、憎らしく思っている。
- 2 「河上のおばさん」は、人なつっこい「風美」との交流を通じて娘にも優しい子に育ってほしいと願っており、「風美」はいつも温和な「河上のおばさん」になついている。一方、「ゆうこちゃん」は「風美」の無邪気な考え方にいらだち、子どもっぽいと思っている。
- 3 「河上のおばさん」は、娘の友達を大切にしようとする気持ちから、大人らしい良識ある態度で「風美」に接しており、「風美」は「河上のおばさん」に親しみを抱いている。一方、「ゆうこちゃん」は「風美」の態度を馴れ馴れしいと感じ、いまいまいしく思っている。
- 4 「河上のおばさん」は、「風美」をうとましく感じていて表面的に優しくしているだけなのだが、「風美」はそのことに気づかずに「河上のおばさん」を心から信頼している。一方、「ゆうこちゃん」は「風美」とは違って母親と仲良くできないことに傷つき、悲しく思っている。

問五 ④ に入れるのに適切な表現を考えて、十字以上二十字以内で答えなさい（読点、記号も一字に数えます）。

問六 線部⑤「風美は返事に困った」とありますが、どうして「風美」は「返事に困った」のですか。その理由としてもっとも適切なものを次の1〜4の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 完成した雛飾りがそれほど気に入るものではなかったのに加え、「ゆうこちゃん」の家で疎外感を感じてつらい思いをしている自分の気持ちを理解してくれない「おばあちゃん」に調子を合わせる気になれなかったから。
- 2 あまり期待していなかった雛飾りが予想以上に立派だったのに加え、いつも意地悪なことばかり言う「おばあちゃん」が突然機嫌よく話しかけてきたので、大人たちの気まぐれな態度にあればはててしまったから。
- 3 いつも意地悪な「おばあちゃん」から意外にも明るく話しかけられて戸惑ったのに加え、「ゆうこちゃん」の家の雛飾りよりも立派で非の打ちようのない雛飾りを用意してもらい、文句を言うきっかけが見当たらなかったから。
- 4 いつも頑固な「おばあちゃん」は会話をしてもまったく楽しくなくて近寄りたいたい存在であるのに加え、たいして立派でもない雛飾りを誇らしげに自慢している「おばあちゃん」の気持ちをはかりかねて、混乱してしまったから。

問七 ⑥ に入れるのに適切な表現を考えて、十字以上二十字以内で答えなさい（読点、記号も一字に数えます）。

問八 線部⑦「ものすごく不機嫌そうな顔をしたおばあちゃんがやってきた」とありますが、勝手に家を飛び出した「風美」に対して、どうして「おばあちゃん」が不機嫌になったのですか。その理由を二十字以上三十字以内で答えなさい（句読点、記号も一字に数えます）。

三 次の記事を読んで、後の問いに答えなさい。

本屋の棚をながめると、おもしろそうな本がたくさんあり、書評を見ると、必読の書とまでは書いてないとしても、どの本もよさそうなことが書いてあります。もし、なにかの題目について参考書を調べようとすれば、とにかく何十冊かの本がその題目について出ているでしょう。そこでたくさんの本を、なるべくはやく読みあげたいという気になるのは当然です。しかも現代の都会の生活には、速さに対する一種の信仰のようなものがあって、だれも彼も忙しく、なにかに追いまくられているように先を急いでいます。① その二つが重なって、もし読書法というものがあるとすれば、それは速読法にほかならないという通念さえ生まれかねません。しかし何事によらず、絶えずこれほど急ぐ必要があるのかどうか。下世話にも「急がば回れ」といいます。むかし兎と亀が競走をしたときに、亀が先に目的地にいたという話は、だれでも知っています。そういう話を、ときどき思いだしてみるのもむだではないかもしれません。

第二次大戦後の世界の映画界には、三つの目立った現象がありました。その第一は、イタリアのネオレアリズモ、その第二は、日本をはじめスウェーデンやポーランドなど、大戦の前には知られていなかった国の映画の国際的な擡頭、その第三は、フランスの若い人たちの生みだしたいわゆる「ヌーヴェル・ヴァーグ」の運動でしょう。そのヌーヴェル・ヴァーグのつくった映画の一つに「恋人たち」というのがあります。その映画のはじめには、さりげなくてじつにすばらしい場面がある。ひまと金があつて退屈している女が、パリから郊外の自分の家へ自動車を運転して高速道路を急いでいると、途中で車が故障を起こします。自分で直そうとしても、ちががきません。通る車を止めて修理を頼もうとしても、なかなか止まってくれない。とかくするうちに、やっと小さな自動車が一台だけ止まり、そのなかから若い男が出てきて彼女の車の故障をみてくれます。男は、とても修繕はおぼつかないといい、女は自宅に客をよんであるので、先を急いでいます。どうにもならないので、女は自分の車をそこへ捨てて、若い男の車に乗せてもらいます。女は先を急ぐ。男は小さな車をゆうゆうと運転し、あとからくる車のほとんどすべてが追いついて行きます。行くほどに、女はますますいらいらし、「もつと急いで」と叫び、男はいよいよ落ちつきはらつて、こういいます。「原則として、わたしはゆっくり進む」——こういう科白を文明批評というのでしょうか。(中略) 男が、あるいはもつと正確に言つて、その男にそういうことをいわせた製作者が、いまも「兎と亀」の話を忘れていないというところに、絶妙の味があると思います。

自動車さえも、速ければ速いほどよいわけではありません。いわんや本を読むのに、いつでもはやいだけが能ではありませんまい。むかしの人は、「読書百遍、意自ら通ず」と言いました。いや、むかし

読書術

の人ばかりではなくて、いまの読書家でも、たとえばアラン(一八六八—一九五二)は「繰り返して読むことのできないような小説ならば、はじめから読む必要がない」と言いました。彼はさらに一步を進めて、「およそ本を読むのにノートをとる必要はない。ノートをとらなければ忘れてしまうようなことは、忘れてしまったほうが衛生的である。」③ 「とまで言ったのです。

これはおおよそ「読書百遍、意自ら通ず」と同じような態度、同じような理屈で、そのことに気がついたのは、むかしの日本人(また中国人)ばかりでなく、西洋にも気がついてきた人が少なくありませんでした。しかしそれは、一面の真理で、本を読むときには、いつ、どこでも、どんな本でも、おそれればおそいほどよい、というわけではないでしょう。むかしの人が、百べん読んで、意おのずから通じるのを待っていた本は、いったいどういう本だったのでしょうか。たぶん「四書五経」ことに「論語」だった。アランは、なにを繰り返して読んでいたのでしょうか。プラトン(前四二七—前三四七)や、ヘーゲル(一七七〇—一八三一)や、スタンダール(一七八三—一八四二)だったようです。しかし、おそらく新聞・雑誌・新刊書の類を繰り返して読んでいたわけではない。そもそも百べん読まなければ意の通じないような新刊書は、そうあるわけのものでもありません。本の読み方には、たしかになるべくおそく読むむという法があります。むかしもいまも、日本でも西洋でも、それを読書法の原因とした本さえも出てくるくらいで、たとえば、フランスの文芸史家エミール・ファゲ(一八四七—一九一六)の『読書術』などは、その典型的な場合の一つでしょう。しかし、そういう読み方をするとときに、読むべき本は古典にかぎられます。「おそく読め」というのは、「古典を読め」というのと同じことになり、また逆に、「古典を読め」というのは、「おそく読め」というのと同じことになるでしょう。遠いむかし、いまとは違つた④ で、違つた⑤ で、違つた読者にあてて書かれた本のなかから、今日の私たちにとつても生きていけるなにかを汲みとるためには、その本との長いつきあひが必要であるのかもしれない。(中略)

「読書は旅に似ている」といいました。旅から帰ってきた人の話を聞いてごらん下さい。同じ北海道へ行つても、同じ九州へ行つても、行つた人によってその印象は違つていでしょう。見た人それぞれの性格が、その旅先での印象にはつきりと出ているからです。どこへ行つても、人は自分を発見します。同じように、どんな本を読んでも、人はみな自分その中に発見するのです。読む側であらかじめ切実な問題を自分自身のなかに持つていて、しかも、その問題が同時に、読む本の問題であるという場合でなければ、そもそも書物をほんとうに理解することができるかどうか疑わしい。⑥ を理解するため

注1 題目テーマ。

注2 ネオレアリズモは一九四〇—五〇年代にイタリアで流行した、文学・映画の表現形態や手法。

注3 擡頭「台頭」に同じ。

注4 ヌーヴェル・ヴァーグは一九五〇年代後半からフランスで展開された映画革新運動。

注5 アランはフランスの哲学者。

注6 プラトンはギリシアの哲学者。

注7 ヘーゲルはドイツの哲学者。

注8 スタンダールはフランスの作家。

国語解答用紙

受験番号

氏名

得点

※注意 Ⅱ Ⅲ の解答欄は設問の順序通りにはなっておりません。
 答えの形によって順序を変えてありますので、まちがえないこと。

一

⑨	⑤	①
⑩	⑥	②
く	⑦	③
	⑧	④
	る	

□

二

問一 □

問二 □

問三 □

問四 □

問六 □

□

問五

問五

10

20

□

問七

問七

10

20

□

問八

問八

30

20

□

三

問一 □

問二 □

問三 □

問四 □

問五 □

問六 □

問七 □

問八 □

問九 □

□

問五

問五

問八

□

問二

問二

30

20

□